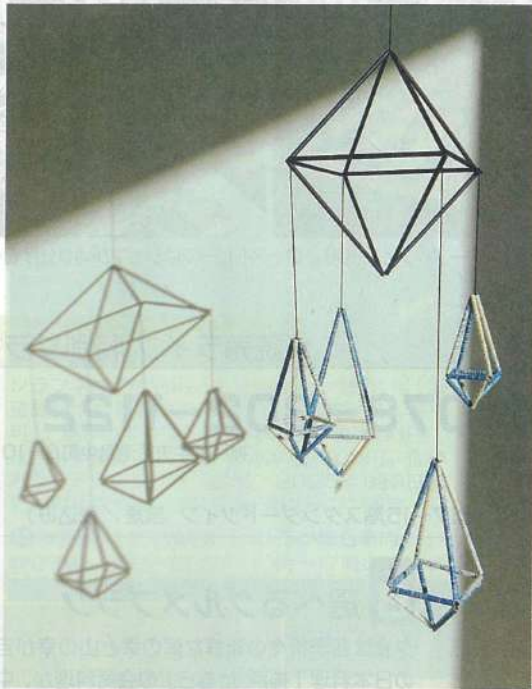


技術が生きる！ 多彩なストロー



シバセ工業(浅口市)



ヒンメリの専用Instagramも開設し、情報を発信(シバセ工業提供)



社長の磯田さん(中央)と玉石さん(左)、守田さん

麦わらに糸を通して、多面体に組み立てた、フィンランドの装飾品「ヒンメリ」。古くから、豊作の象徴として、クリスマスに飾られてきた。今は世界に広まり、日本でも人気が高い。

昨年、麦の茎に似せたプラスチック製の「ヒンメリストロー」をスト

ローメーカーのシバセ工業が発売した。口径2・5ミと3ミの2種で、カラーは茶やベージュのほかに、赤や黄など10色をそろえた。クリスマスを目前にして注文が相次いでいる。同社営業部長の玉石一馬さんと、主任の守田和史さんは、「ヒンメリ作りは、誰でも気軽に始められる。コロナ禍の中、家で過ごす時間が増え、ヒンメリストローのニーズを感じた」と話す。

国産ストロー発祥の地、浅口市

ところで、同社が本拠を置く浅口市が、国産ストロー発祥の地だとご存じだろうか？

始まりは明治時代。当時、この辺りは麦の栽培が盛んで、麦わらを真田ひものように編んだ「麦稈真田」や麦わら帽子、そつめんなど、麦関連の産業が次々と誕生した。麦の茎を使ったストローもその一つだった。

産地企業の一社だった同社は、精米・精麦の芝勢商店として1926年(大正15年)に創業し、69年(昭和44年)にストロー製造へ事業を転換。当時すでに材料は麦の茎からポリプロピレンに替わっていた。後発組だっ



同社の製品を愛用する、岡山在住のストローアート作家・平田慎一さんの作品(平田さん提供)

だが、すぐに大手飲料メーカーとの契約が決まり、大きく成長した。しかし、90年代後半になると、浅口のストロー業界に暗雲が垂れ込める。町工場の多くは、得意先だった個人経営の喫茶店の激減や、輸入製品の影響で、ほぼ廃業に追い込まれた。

同社もピンチに陥る。東京の企業が、紙パックに接着包装する2段階伸縮ストローを開発したためだ。シバセは99年から5年ほど、低迷する。「工業用ストロー」で

市場開拓

猛烈な逆風の中、見いだした活路が、飲料用以外への応用だった。3代目社長の磯田拓也さんの前職が、日本電産のエンジニアだったことから、技術者ならではの視点が生きた。スプレーノズルやドリルカバ、シシャモをトレイの中で固定



アルコール検知器やPCR検査用のストローも開発

する棒など、ストロー技術を土台とした様々なパイプ製品が医療、工業、食品業界などに採用されている。同社は、こうした飲料用途以外の製品を「工業用ストロー」と命名し、技術価値の底上げを図った。

現在、取引先は5000社を超え、工業用が売り上げの4割を占める。磯田さんは「我々の強みは0・1ミ単位でストローの直径を調節できる『薄肉成形技術』です。さらに、軽くて衛生的、低コストとあって、金属や木材の代替になることが年々認知されています」と自信を示す。時代の変化を乗り越えた同社の踏ん張りは、これからの新たな市場を創り出していくだろう。

(福田ひろみ)

【シバセ工業】
浅口市鴨方町八条院中30037
0865・44・22215